



IYNC2016 會議報告



日本原子力学会 若手連絡会 (JYGN)

目次

1. 概要	2
IYNC2016 プログラム	3
2. 技術プログラム	4
(1) 開会セッション	4
(2) 基調講演	5
(3) カントリーレポート／特別表彰	6
(4) プレナリーセッション	7
(5) パネルセッション／ワークショップ	9
《ワークショップ紹介》	10
(6) 技術発表（テクニカルトラック／ポスターセッション）	13
《JYGN 報告》“Confronting Reality: Experience from Fukushima Tour”	14
(7) 閉会セッション	15
コンチネンタルレポート	15
表彰式	16
3. 施設見学／社交行事	17
(1) 施設見学（Technical Tours）	17
(2) 社交行事（Social Events）	18
4. IYNC 理事会／アジア太平洋 YGN 会合	19
(1) IYNC 理事会（Board of Directors Meeting）	19
(2) アジア太平洋 YGN 会合	20
5. 参加者の声	21
6. IYNC2016 を終えて – JYGN 所感	23

1. 概要

2016年7月24～30日にかけて、中国・杭州にてIYNC2016が開催された。IYNC2016は、IYNC (International Youth Nuclear Congress)が主催する、原子力に携わる若手を対象とした国際会議である。

主催者であるIYNCは、世界の原子力業界の若手(原則35歳以下)有志による国際NGOであり、原子力の平和利用の促進や、世代や国境を越えた知識の継承を目的として、2000年以来、2年に1度同様の国際会議を開催している(ウェブサイト：<http://www.iync.org/>)。同会議は、プログラムの策定や講師の招聘、参加者の募集、資金調達など、運営の全てを若手が担っているのが特徴である。

9回目となった今回は32か国から400名以上の参加があり、41件の講演、241件の技術発表(うちポスター56件)があった。日本からの参加者は11名であった。本会議の参加者は、世界各国の原子力業界を牽引していくことが期待される若手研究者や技術者が主体であるが、原子力関連企業や政府機関、国際機関などの事務系職員や広報担当者も参加していた。その他にもエネルギー系のコンサルタントやベンチャーキャピタリスト、スタートアップの起業家など、原子力に関わる様々な業界の若手が参加していた。

また本会議は、世界の原子力業界の協賛・後援を受けており、中国核工業集団(CNNC)をメインスポンサーに、ウェスティングハウスや日立製作所、国家電力投資集団(SPIC)、中国広核集団(CGN)、中国核建集団(CNEC)などが協賛した(一部は展示ブースも設置)。

なお、開催地の杭州は、世界遺産の西湖のある風光明媚な古都であり、国内外から観光客も多く訪れているようだが、2016年秋にはG20首脳会議が開催されることもあり、会議場やホテル、公共交通などの開発が進んでいた。



(上段) 会場及び受付

会議バナー

(下段) 協賛企業ブース及びパンフレット

IYNC2016 プログラム

IYNC2016 のプログラムは、基本的には通常の国際学会と同じく、技術プログラムや施設見学などから構成されるが、基調講演や技術発表のみならず、よりインタラクティブなパネル討論やワークショップなど、IYNC ならではの特色のあるプログラムも存在する。

会議で扱われるトピックは、炉物理や熱流動、運転・保守、材料、原子力安全、放射線防護、核燃料サイクル、放射性廃棄物処理・処分、次世代炉、核融合、非発電利用など、原子力全般にわたっている。また、技術的なトピックのみならず、ファイナンスや人材育成、コミュニケーション、さらにはエネルギーや気候変動などの政策的なテーマまで幅広くカバーしている。

また、IYNC は人的ネットワークの形成にも重きを置いており、参加者同士の交流を促すため、社交行事が充実しているのも特徴の 1 つである。

	Sunday (24th July)	Monday (25th July)	Tuesday (26th July)	Wednesday (27th July)	Thursday (28th July)	Friday (29th July)	Saturday (30th July)	
08:30								08:30
09:00		Opening Session						09:00
09:30		Coffee Break	Technical Session #2	Technical Session #4	Technical Session #5			09:30
10:00								10:00
10:30		Keynote Session	Coffee Break	Coffee Break	Coffee Break			10:30
11:00								11:00
11:30	Registration		Plenary Session, Atom for Development	Plenary Session, Nuclear New Build	Panels Sessions & Workshops			11:30
12:00						Technical Tours	Cultural Event (optional)	12:00
12:30		Lunch Break	Lunch Break	Lunch Break offered by CNNC	Lunch Break	(starting between 4:10am and 8:45am, depending on tour)		12:30
13:00								13:00
13:30		Country Reports	Panels Sessions & Workshops	Poster Session	Plenary Session, Energy and climate change			13:30
14:00								14:00
14:30								14:30
15:00	IYNC Games & Registration							15:00
15:30		Coffee Break	Coffee Break	Panels Sessions & Workshops	Coffee Break			15:30
16:00					Closing Ceremony & Awards			16:00
16:30		Technical Session #1	Technical Session #3					16:30
17:00								17:00
17:30								17:30
18:00	Registration							18:00
18:30		Special Session: Future of IYNC (optional)						18:30
19:00			Big Show	IYNC BoD (invited participants only)				19:00
19:30								19:30
20:00	Welcome Reception				Farewell Dinner			20:00
20:30								20:30
21:00								21:00
21:30								21:30

IYNC2016 スケジュール

2. 技術プログラム

(1) 開会セッション

開会セッションでは、IYNC2016 共同議長を務める Melissa Crawford 氏 (IYNC 代表) 及び Daiyong Song 氏 (中国原子力学会 YGN 代表) より挨拶があった後、共催者である中国原子力学会の会長をはじめとする中国原子力界の要人、並びに Dazhu Yang 国際原子力機関 (IAEA) 事務次長がスピーチを行った。Yang 事務次長は、スピーチの冒頭、天野之弥事務局長からのメッセージを紹介した。

【主な来賓】

- Dazhu YANG, Deputy Director General and Head of the Department of Technical Cooperation, International Atomic Energy Agency (IAEA)
- Guanxing LI, President, China Nuclear Society (CNS)
- Hua LIU, Chief Engineer of Nuclear Safety, Ministry of Environmental Protection of the People's Republic of China, China
- Shirong ZHOU, Deputy Director, National Nuclear Safety Administration, China
- Wei SU, the Secretary of Secretariat, China Association for Science and Technology (CAST), China
- Yiren WANG, Vice Chairman, China Atomic Energy Authority (CAEA), China
- Zhimin QIAN, President, China National Nuclear Corporation (CNNC), China



開会セッション (会場の様子)



Crawford 氏 (IYNC)



Song 氏 (CNS-YGN)



Yang 事務次長 (IAEA)

(2) 基調講演

開会セッションに続いて行われた基調講演（Keynote Session）では、会議全体のテーマでもある”Nuclear Powering Our Life”と題して、世界及び中国の原子力産業界を代表して4件の講演があった。

なお、本セッションは、堀尾健太氏（東京大学、JYGN 国際担当）が司会を務めた。

【登壇者】

- Gavin LIU, President of Asia, Westinghouse Electric Company, China
- Jon W. BALL, Executive Vice President of Nuclear Plant Projects, GE-Hitachi Nuclear Energy, United States
- Shengbing SU, Vice President, CGN Power, China
- Zhongtang WANG, President, State Nuclear Power Technology Company (SNPTC), China



Liu 氏（ウェスティングハウス・アジア代表）



堀尾氏（司会）



Ball 氏（GE 日立・副社長）



質疑の様子

(3) カントリーレポート／特別表彰

会議初日（25日）午後には、各国のYGN代表が自国の原子力利用の現状とYGN活動の概要を報告するカントリーレポートが行われた。日本からは西山潤氏（東京工業大学, JYGN会長）が登壇した。

本セッションはIYNCならではのプログラムの1つであり、原子力を巡る国際情勢を一望するとともに、各国のユニークな若手活動を知る貴重な機会である。



カントリーレポート

(左) 西山氏 (右) 西山氏プレゼン

またカントリーレポートに続いて、IYNCによる特別表彰が行われた。本表彰は、近年特筆すべき活動実績のあったYGNを表彰するもので、長年にわたってIYNCに貢献し、不幸にして2015年11月のパリ同時多発テロ事件に巻き込まれて亡くなったJuan Alberto Gozalez-Garrido氏（EDF勤務、スペイン出身）を偲んで創設されたものである。

Juanのご家族も同席する中で行われた今回は、チェコYGNが受賞した。



特別表彰の様子

(4) プレナリーセッション

2～4日目(26～28日)にかけて、3件のプレナリーセッションが行われた。プレナリーセッションでは、世界各国の第一人者を招き、開発、新規建設、気候変動といった、原子力に関わる重要課題が議論された。

日本からはエネルギーと気候変動に関するプレナリーに山地憲治氏(RITE)が登壇した。また、堀尾氏(東大, JYGN)が3セッションの統括責任者を務めた。

PS1: “Atom for development: Meeting Human Needs” (26日)

2015年秋に国連にて「持続可能な開発目標(SDGs)」が採択されたことを受け、グローバルな開発に対して、非発電利用を含む原子力技術が果たしうる役割について議論された。

- Dazhu YANG, Deputy Director General and Head of the Department of Technical Cooperation, International Atomic Energy Agency (IAEA)
- Djarot Sulistio WISNUBROTO, Chairman, National Nuclear Energy Agency of Indonesia (BATAN), Indonesia
- Joseph ODHIAMBO, Board Member, Kenya Nuclear Electricity Board (KNEB), Kenya

PS2: “Nuclear New Build: Opportunities and Challenges” (27日)

原子炉の新規建設を巡る情勢や課題について、軽水炉のみならず、重水炉や高温ガス炉なども含めて議論された。

- Dezi YANG, Senior Vice-President, CANDU Energy Inc., Canada
- Hua CHEN, President, China National Nuclear Power Cooperation (CNNP), China
- Jeff BENJAMIN, Senior Vice President for New Plants and Major Projects, Westinghouse Electric Company, United States
- Liben GAO, Director of Nuclear Power Industrialization Office, China Nuclear Engineering & Construction Group Corporation (CNEC), China

PS3: “Energy and Climate Change: Toward a sustainable future” (28日)

閉会セッション直前に行われ本セッションでは、2015年末の気候変動枠組み条約締約国会合(COP21)での「パリ合意」を踏まえて、今後の気候変動対策の見通しや、原子力を含む電力・エネルギー業界の役割について議論された。

- Bruno LESCOEUR, Senior Advisor to the Chairman and CEO of Electricité de France (EDF), France
- Jiankun HE, Professor and Director, Institute of Low Carbon Economy, Tsinghua University, China
- Kenji YAMAJI (山地憲治), Director General, Research Institute of Innovative technology for the Earth (RITE), Japan

(当初、世界原子力協会(WNA)からも講演者が予定されていたが、キャンセルとなった。)



プレナリーセッション会場の様子



講演者

(左から Wisnubroto 氏 (インドネシア), Odhiambo 氏 (ケニア), 山地氏)



聴衆および質疑の様子



モデレーターを務めた若手諸氏

(左から Kageliza 氏 (ケニア), Srinivasan 氏 (インド), Michel-Levy 氏 (フランス))

(5) パネルセッション／ワークショップ

2～4 日目（26～28 日）にかけて、7 件のパネルセッションと、15 件のワークショップが開催された。パネルセッションでは 3～5 名の専門家（若手も含む）によるパネル討論、ワークショップでは少人数でのグループワークが行われた。

日本からは、原子力安全・核セキュリティ・保障措置に関するパネルに松澤礼奈氏（JAEA）、核融合に関するワークショップに菊池満氏（QST）がそれぞれ登壇した。

パネルセッションのテーマ一覧

1. Advanced reactors: technical, economics, licensing and policy aspects for energy innovation
2. The science of nuclear communication
3. Radioactive waste – meeting the challenge
4. Women in all things Nuclear
5. The future generation in nuclear: recruiting new leaders
6. Nuclear safety, security, safeguards and 3S regimes
7. Nuclear saves lives: Atoms for better healthcare

ワークショップのテーマ一覧

1. Nuclear in the energy mix, potential and challenges
2. A sustainable nuclear energy: caring about the next generation
3. Accident tolerant fuels and cladding for NPP
4. (Nuclear) Crime Scene Investigation
5. Fusion
6. Severe accident management – An integrated approach
7. Safety culture
8. How to finance a new nuclear project
9. Mentoring programme
10. The locks of nuclear industry
11. World Wide business
12. Application of Nuclear Techniques in cultural heritage characterization. Fake or original?
13. Communication in case of crisis
14. Communication: where do we fail?
15. Fuel cycle game



パネルセッション

《ワークショップ紹介》

ワークショップは、教育・研修的な要素も組み込まれた実践的な内容で、通常の国際学会では見られない、IYNC に特徴的なプログラムであることから、以下、特に興味深い内容だったワークショップを抜粋して紹介する。

WS4: (Nuclear) Crime Scene Investigation (核鑑識)

核鑑識に関する 15 分程度の概要説明のあと、放射性物質の盗取に関する架空のケースについてグループワークを行った。オランダ科学捜査研究所と IAEA 事故・緊急センター(IEC)のスタッフが講師を務めた。

今回のケースでは、とある港にて、出所不明の放射性物質を積んでいる疑いのあるトラックが見つかった、という設定で、各グループには、様々な状況や証拠が示されたカードが配布され、そこから違法行為の有無や犯人の推定などを行った。

状況の進展にあわせて、運営側から追加でカードが配布されるなど、実際の鑑識の手順をなぞるような形で進行されたことから、実践的で大変勉強になった。

(なお、本ワークショップは、Best Workshop Concept として表彰された)



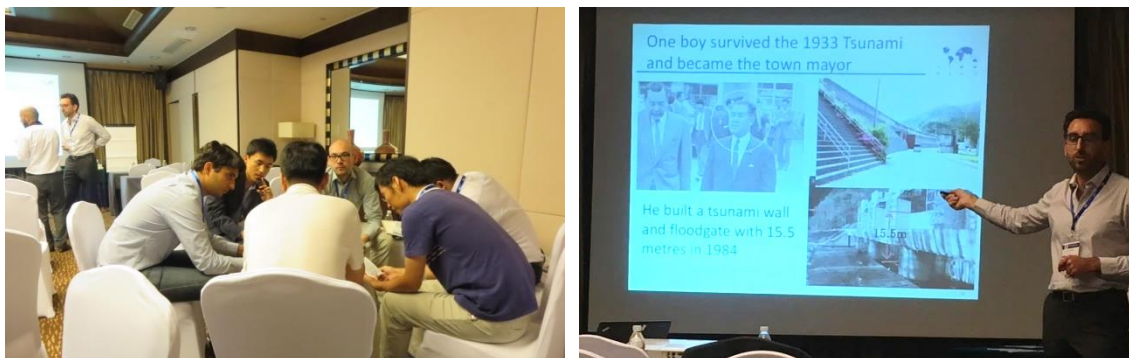
核鑑識ワークショップ

(左) 実際の鑑識でも使われている道具を用いたサンプリング (右) 得られた証拠の検討

WS7: Safety Culture (安全文化)

世界原子力発電事業者協会 (WANO) が作成した安全文化ポケットブック (WANO Principles) を用いて、グループに分かれて、参加者の出身国における原子力安全文化を発表し、議論を行った。WANO のスタッフが講師を務めた、

まとめでは、講師から東北電力女川原子力発電所の津波対策が紹介された。技術者である平井弥之助が貞観大津波を考慮した津波対策を強く訴えたことにより同発電所は事故を免れたことを紹介し、安全文化を持つことの大切さが説かれた。



安全文化ワークショップ

(左) グループ討論の様子 (右) 講師によるまとめ

WS8: How to finance a new nuclear project (ファイナンス)

新規原子力発電所プロジェクトに係るコストや資金調達について、原子力プラントメーカー、電力会社、投資会社の立場から講義が行われた後、ケースワークを行った。講師は、ウェスティングハウス、FORATOM、中国国家電力投資集団 (SPIC) から招かれた。

今回のケースでは、世界的な原子力プラントメーカー、欧州の電力会社、中国の投資会社が参画する新規原子力発電所建設プロジェクトについて、3つのグループがそれぞれ、立地国の①政府、②規制当局、③銀行の立場から、メリットとデメリットについて検討し、議論した。

グローバル化する原子力プロジェクトにおけるリスクについて議論でき、大変有意義なワークショップであった。



ファイナンスワークショップ

(左) レクチャーの様子 (右) グループ討論の結果発表

WS9: Mentoring program (人材育成)

リーダー育成のためのスキームや課題など把握するための講義を聴講し、その後人材育成・指導を効果的に実施するための施策を2グループに分かれて、①メンター（指導者）／②メンティー（被育成者）のそれぞれの視点で議論し、最後にグループ毎の議論の結果を紹介した。人材育成の課題やその解決方法について、指導者と被育成者の異なる視点から検討することで視野を広げることができ、有益であった。



人材育成ワークショップ

(左) 講義スライド (右) グループ発表

WS11: World Wide business (国際展開)

IAEA 及びウェスティングハウスの講師から、国際ビジネスにおける異文化コミュニケーションについての講義が行われた。その後、グループに分かれ、参加者の出身国や居住国におけるコミュニケーションの文化的特徴や問題点などについて情報共有を行った。

グループワークからは、欧州とアジアではコミュニケーションの取り方にかなりの違いがあることをあらためて実感した。また発表の際には、言語的な劣等感もあるためか、アジアからの参加者はあまり積極的に前に出ない傾向があった。

講師からは、各国の文化的な背景によるステレオタイプは、コミュニケーションをとる際に効果的に活用できる一方で、個々人のパーソナリティによって異なることもあるため、ステレオタイプをバランスよく利用することが良いとの指摘があった。

WS13: Communication in the case of Crisis (緊急時のコミュニケーション)

緊急事態が発生した場合のコミュニケーションについて、メディアや市民にいかに関係情報を伝えるべきかといった観点で、実際の事案を基にした架空のケースに基づいて、プレスリリースの作成等を行った。IAEA 事故・緊急センター (IEC) の Emergency Response Training Officer が講師を務めた。

どれだけ短時間に、入手した情報を効果的に伝えるか、不確かな情報を伝えないか、混乱を避けるような伝え方ができるか、といった点は、原子力安全事案においても核セキュリティ事案においても重要であり、活発で参考となるワークショップであった。

(6) 技術発表 (テクニカルトラック/ポスターセッション)

IYNC2016における技術発表の機会は、1～4日目に行われたテクニカルトラック（口頭発表）と、3日目午後に行われたポスターセッションの2つであった。両者とも通常の国際学会と同じスタイルで、口頭発表での持ち時間は20分（質疑応答を含む）、ポスターセッションのコアタイムは90分であった。

テクニカルトラックのテーマ一覧

1. NPP Operation and Maintenance, Design Modification
2. Advanced Reactors Design (including Gen IV)
3. Reactor Physics and Neutronics
4. Thermal Hydraulics
5. Nuclear Fuel and Materials
6. Nuclear Safety, Security, Safeguards (including non-proliferation) and Radiation Protection
7. Nuclear Fuel Cycle, Waste Management and Decommissioning
8. Fusion
9. Education, Human Resources Development and Knowledge Management
10. Politics, Economics, and Societal issues
11. Applications of Nuclear Technology in Non-power Sectors
12. YGN best practices



技術発表

(左) テクニカルトラック (右) ポスターセッション

《JYGN 報告》“Confronting Reality: Experience from Fukushima Tour”

テクニカルトラックの1つに、各国YGNの特徴的な活動を紹介する”YGN Best Practice”というテーマがあり、JYGN を代表して菅原慎悦氏（電中研）が、”Confronting Reality: Experience from Fukushima Tour”と題して報告を行った。

報告内容は、2016年2月にIYNC及びアジア太平洋地域のYGNメンバーを日本に招待し、福島第一原子力発電所構内や避難区域周辺を訪問した活動に関するもの。

発表後の質疑では、フロアから、「現地で実際見た印象は事前に想像していたものより良かったか悪かったか」「現場を見ることによってどのような意義があるか」という質問があった。JYGNからの回答に先立って、福島ツアーに参加したEileen Langegger氏（欧州原子力学会YGN会長、オーストリア）から、「事故からの5年間にどれだけ進歩があったのかを体感でき、有意義だった」「チェルノブイリも訪問したことがあるが状況は全く異なり、日本は事故のあったサイトや周辺地域を本当の意味で元に戻そうとしていると感じた」「できる限り多くの人に訪問を推奨したい」との応答があり、JYGNとしてツアーを実施した意義をあらためて実感することができた。

なお、Langegger氏は、ツアー参加後、原子力関係の国際会議やオーストリア国内の大学等にて、自身が福島で視察した経験を共有しているとのこと。



菅原氏（JYGN）



福島ツアー参加者によるコメント



報告の様子

(7) 閉会セッション

コンチネンタルレポート

閉会セッションの冒頭には、5 地域（欧州、北米、中南米、アジア太平洋、アフリカ）の代表より、それぞれの地域における YGN 活動の報告がなされた。アジア太平洋地域については、JYGN 堀尾健太氏が、同地域での YGN 立ち上げに向けた検討状況を報告した（20 頁参照）。地域的な YGN 活動は、欧州や北米では、過去 20 年近くにわたり活発に行われてきたが、近年では他地域でも国を跨いだ活動や交流が模索されている。

なお、欧州原子力学会 YGN (ENS-YGN) から、2017 年 6 月に英国マンチェスターにて開催する European Nuclear Young Generation Forum 2017 (ENYGF2017) について、欧州以外の地域からの参加も歓迎する旨告知があった。



Eileen Langedger 氏（欧州）



Nathan Paterson 氏（欧州）



Courtney Tampas 氏（北米）



Cristian Vega 氏（中南米）



堀尾健太氏（アジア太平洋）



Pamella Kageliza 氏（アフリカ）

表彰式

IYNC2016 に対する貢献（発表，運営）に関する 5 つの賞（下記参照）と，今回から創設された Early Career Award の表彰が行われた。Fidelma Oconnell 氏（JAEA）が Early Career Award を受賞した。

1. Best Poster (ポスター)
2. Best Oral Presentation (口頭発表)
3. Best Summary (サマリー)
4. Best Student Contribution (学生発表)
5. Best Workshop Concept (ワークショップのアイデア・運営)



表彰式

(左) Oconnell 氏 (写真中央左) (右) 受賞者一同

最後に，IYNC2016 共同議長の Crawford 氏と Song 氏，及び次回 IYNC2018 の開催国アルゼンチン YGN を代表して Vega 氏から挨拶があり，そして次期 IYNC 代表に選出された Denis Janin 氏の所信表明があった後，閉会となった。



IYNC 次期代表の Janin 氏



IYNC2016 技術プログラム委員

3. 施設見学／社交行事

(1) 施設見学 (Technical Tours)

29日(金)に、以下5件の施設見学が実施された。特に三門原子力発電所は、世界初となるAP-1000が立地していることから、参加者の関心が高く、早々に定員が埋まった。

1. Qinshan NPP
(秦山原子力発電所)
2. Sanmen NPP
(三門原子力発電所)
3. SEC(Shanghai Electric Corporation)
& SNERDI (Shanghai Nuclear Engineering Research and Design Institute)
4. CIAE (China Institute of Atomic Energy)
※北京経由で帰国する参加者が対象
5. CGN (China General Nuclear Power Group)
※香港経由で帰国する参加者が対象

《参加報告》 Qinshan NPP (秦山原子力発電所)

1985年に着工し、現在は柏崎刈羽原子力発電所を超える9つの原子炉(PWR)が商業運転中である。設備容量は6564MWとなり、50GWh/yearの発電電力量を有する。またWANOのパフォーマンスレビューにもNo.1に5回ランクインしており、4年間の設備利用率は89%を維持している。

見学先はPWRシミュレータ室とECC(Emergency Control Center)の2箇所、見学者は約30名程度であった。ECCは2012年5月に建設され、2013年9月18日に運用を開始した。福島第一原子力発電所の事故後にECCが初めて稼働したのは、秦山原子力発電所であるとのことである。



秦山原子力発電所

(左) CNNP (右) PWR シミュレータ

(2) 社交行事 (Social Events)

IYNC は人的ネットワークの形成にも重きを置いていることから、参加者同士の交流を促すため、レセプションや夕食会、文化イベントなど、社交行事が充実しているのが特徴である。また、朝食や昼食も会場で提供され、自由に交流を図ることができた。

IYNC ゲーム (24 日午後)

参加者同士の交流・アイスブレイクを目的として、西湖湖畔のウォーキングが行われた。



Welcome Reception (24 日夜, 立食)



Big Show (26 日夜, 中国演劇鑑賞)



Farewell dinner (28 日夜, 着席)



Cultural tour (30 日, 希望者のみ)

京杭大運河のクルージングや美術館巡り等を行った。

4. IYNC 理事会／アジア太平洋 YGN 会合

(1) IYNC 理事会 (Board of Directors Meeting)

27日(水)18時より、IYNC 理事会 (Board of Directors Meeting) が開催された。理事会は年1回開催される IYNC の最高意思決定機関であり、各国代表 (NR, National Representative), IYNC 役員 (Officer), 特別委員 (MaL, Member-at-Large) 等から構成される。JYGN からは堀尾氏 (NR) と菅原氏 (MaL) が出席した。

【主な議題】

- 2014～2016年の活動報告
 - 国際会議等への参加 (IAEA 総会, Nuclear4Climate 等)
 - 機関誌の発行, 財務報告など
- 定款 (Bylaws) の改訂
- IYNC2018 開催国の選挙
- 次期 IYNC 役員選挙
- 次期特別委員 (MaL) の選出



理事会に報告を行う IYNC 役員

[左から Crawford 代表, Ryabikovskaya 副代表, Srinivasan 事務局長, O'Connor 財務担当]



理事会での議論の様子

【主な結果】

選挙の結果、IYNC2018 の開催国はアルゼンチン（都市はバリロチェ）に決定し、次期役員は以下 4 名に決定した。また、菅原氏が今期に続いて MaL（定員 20）に選出された。

- 代表 (President) Denis Janin (E.ON, France/Germany)
- 副代表 (Vice-President) Luca Capriotti (Idaho National Lab., Italy/US)
- 事務局長 (Executive Secretary) Jing Hu (Argonne National Lab., China/US)
- 財務担当 (Treasurer) AJ Lambert (Exelon, US) ※欠席



Janin 氏（次期代表）



Capriotti 氏（次期副代表）



Hu 氏（次期事務局長）

（2）アジア太平洋 YGN 会合

25 日（月）16 時より、アジア太平洋 YGN（AP-YGN, Asia-Pacific Young Generation in Nuclear）の会合が開催された。JYGN からは、AP-YGN 暫定議長を務める堀尾と、菅原・嶋田が出席した。

本会合は 1 月末に東京で開催した第 1 回会合のフォローアップであり、起草中の定款（Bylaws）及び運用規則（Operating Rule）について議論を行い、定款については、若干の修正が必要なものの、原則合意を得た。今後、暫定議長（堀尾健太，日本）及び暫定事務局長（Tim Rownes，豪州）が定款および運用規則の修正を行い、年度内の締結を目指す。

次回会合は、2017 年前半にマレーシアが開催を予定している Regional Youth Nuclear Summit にあわせて開催することを目指す。



アジア太平洋 YGN 会合

5. 参加者の声

嶋田和真 (JYGN)

私は今回が初めての参加であったが、今年 2 月の IYNC メンバーによる福島視察に同行したこともあり、今回は IYNC メンバーとの繋がりを強化する絶好の機会となった。IYNC メンバーは各国の原子力分野の若手の中でも活動的な存在なので、このネットワークは貴重であり、今後も関係を続けていきたいと思う。

また、私は昨年度の世界原子力大学 (WNU) に参加していたが、IYNC2016 にて WNU の同窓生とも再会できたことが嬉しかった。WNU は、IYNC 同様、人的ネットワークを構築するには最高の場であるが、このような形でネットワークを維持できるのは非常に有益だと感じた。日本で開催されている IAEA-Nuclear Energy Management School の同窓生にも同様のことが言えると思うので、関係者の方々には IYNC への参加を強くお勧めする。

菅原慎悦 (電力中央研究所, JYGN)

IYNC2016 は、「中国らしさ」を随処に印象付けられる会合であった。2013 年 11 月の IYNC China Trip に参加して以来、大きく発展する中国の原子力業界と活発な中国 YGN とを目の当たりにしてきたが、今回の会合においても、スポンサーシップや中国人若手参加者の活発な議論など、成長・拡大し続ける同国の勢いを大いに感じた。

また、開会セッションやプレナリーセッションの一部の講演が中国語で行われたり、その内容も若手へのメッセージより国や企業の PR 的側面が強調されたりするなど、こちらもある意味で「中国らしさ」を感じる場面が多かった。将来 IYNC 日本開催を検討していく際には、我が国の「らしさ」を可能な限り活かしつつ、IYNC の活動理念とどのように止揚・調和させていくかを考えていく必要がある。

一方で、IYNC という枠組み、またその基盤となる考え方自体が、変革を迫られている時期なのかもしれない、とも感じている。私は Member at Large として IYNC 理事会に参加したが、新規加盟のアフリカ諸国などから従来の IYNC の考え方や議事の進め方に対して多くの意見や批判が出され、長時間の議論になる場面がたびたびあった。

十八史略に「創業と守成と孰れか難き」という一節があるが、IYNC 設立から約 20 年が経ち、欧米中心の組織からアジア・アフリカも巻き込んだグローバルな枠組みへと変質しつつある今は、まさに「守成」の時期と言えよう。我々 JYGN がそのなかでどのような役割を果たすべきか、議論そして実践を重ねていきたい。

西山潤 (東京工業大学, JYGN)

IYNC2014 (スペイン・ブルゴス) に続き 2 回目の IYNC の参加となったが、前回の会議で知り合った参加者とも再会でき、非常に楽しく有意義なものであった。IYNC の会期は 1 週間に満たないが、同世代で今まさに原子力に携わっているという共通点から、専門にこだわらず気軽に話しかけやすい雰囲気がある会議であり、国際的なネットワークを構築する上で非常に良い機会である。

パネルセッションやテクニカルトラックでは、中国の勢いが強く感じられた。この10年で原子力専攻が多く新設され、現在は年間1000人も新入生が原子力分野に入学しているとのこと。また海外で学位を取った若い教授が中国に戻ってきて彼らを指導しているとのことであり、かつての日本も同様だったかもしれないが、様々な研究や開発計画の発表を聞いているとその勢いに羨ましささえ感じるものだった。日本の研究開発能力は高いと思っているが、実際にモノを作る場がある中国があつという間に追いついてくる気がした。

藤原健太郎 (JAIF)

このような若手が集まる国際会議は、国際的な人的ネットワークを構築できるよい場だなと感じた。普段、他国の若手と会うことや議論することは滅多にないため、良い刺激になったが、プログラムもWSなどが取り入れられ、参加型になるように工夫されていた。

秦山原子力発電所のテクニカルツアーは、視察先がPWRシミュレータとECC（これは会議室での説明のみ）に限られ少し残念だったが、全体を通してよい経験になった。

また、英語の必要性は十分に痛感した。日本人の不得意とする「聞く」「話す」のスキルは、これからもっとしっかり身につけないといけないなど、改めて感じた。

堀尾健太 (東京大学, JYGN)

2010年と2014年に続き3度目の参加であったが、今回は基調講演等の責任者を務め、会議運営にも深く関与した。運営面では、IYNCの価値観や伝統と、ホスト（中国）の考え方が異なり、調整が難航する局面もあったが、多文化かつ国際的なチームで仕事を行う際、このような調整は避けて通れないことであり、良い経験を積むことができたと思う。

IYNCの最も大きな価値の1つは、世界各国の若手とのネットワークづくりだが、継続して参加し、また一步踏み込んで運営に参画したことにより、効果的に人的ネットワークを構築・拡大できたと感じた。IYNC役員や各国YGNの代表達をはじめとして、世界各地に、原子力を巡る様々な情勢や課題等について、率直に意見交換のできる友人ができたことは大きな財産である。

松澤礼奈 (JAEA)

「3S レジームと安全・セキュリティ・保障措置における課題」と題するパネルセッションにパネルとして参加し、3Sの重要性と特に核セキュリティの概要、重要性、課題に関して発表を行った。セッション参加者のほぼ全員が核セキュリティについては知識がない中で、概要ではあるがその意義と重要性について伝える機会となり、若手への啓蒙の機会として有意義であった。広く世界各国の若手にアプローチできる機会は少ないため、今後も有効に機会を活用していきたいと考える。

IYNCへの参加は初めてであったが、若手が自主的に同世代の啓蒙と知見の共有の場を組織していることに感銘を受けた。各国、地域またIYNC規模でさらに活動を活発化させてくれることを期待したい。

6. IYNC2016 を終えて – JYGN 所感

IYNC2016 は、充実した技術プログラムや豊富な社交の機会、そして活発な若手の参加といった伝統的な IYNC の価値を継承しつつ、2002 年以來のアジアでの開催ということで、ある種の新鮮さも兼ね揃えた会議となったが、総じて成功裏に終わったと感じている。

技術プログラムの進化

従来からプログラムの多様さは IYNC の特徴の 1 つであったが、特に 2012 年から始まったワークショップは、回を重ねるごとに洗練され、いまや最も魅力的なプログラムの 1 つとなってきている。運営の全てを若手の自主的な取組みに依存している IYNC において、このような「進化」は特筆すべきことだが、今後も更に充実したプログラムを期待したい。

中国の勢い、「らしさ」

IYNC2016 では、中国の勢いや「らしさ」を随所に感じた。中国では原子力産業に従事する人間の 8 割が若手だと言われるが、2013 年の CNS-YGN 設立以後の活発な活動ぶりには目を瞠る。他方、IYNC の根幹にある「若手のリーダーシップ」「国境や世代を越えた繋がり、知識の継承」といった価値観はまだ十分に共有されていないように見える。国や地域によって文化や社会制度等が異なり、YGN 活動にも違いが出るのは当然のことであるが、欧米中心に発展してきた IYNC にとっては、今後への示唆に富む経験だったのではないか。

日本の参画

日本からは講演者を含めて 11 名が参加したが、前回 IYNC2014 の 18 名から減少してしまっただけは残念だった。一方で、JYGN として、運営委員 4 名が参加したことに加えて、国際活動担当の堀尾が Plenary Sessions Chair を務め、また今年 1 月には IYNC2016 実行委員会 (Executive Committee, Ex-Com) の会合を東京にホストするなど、これまで以上に積極的に参画・貢献できた会議となった。これらの積極姿勢により、日本の存在感は示せたと感じており、また IYNC や各国 YGN との関係強化も図れたと考えている。

国際的な情報発信の重要性

2011 年以來、JYGN は「福島の実況についての積極的な情報発信」を国際活動の柱の 1 つに掲げてきたが、YGN Best Practice セッションにて、JYGN が実施した福島ツアーの参加者から有益なフィードバックが得られたことは、我々の目標が少しずつだが実を結びつつあることを実感する良い機会となった。同時に、我々自身も、福島をはじめとする日本の現状をより良く理解するため、引き続き努力していく必要性をあらためて認識した。

IYNC と JYGN 国際活動の今後

次回 IYNC2018 の開催国はアルゼンチンに決まったが、初めてのラテンアメリカ開催となると同時に、欧州・北米以外での開催が続くのも初となる。歴史的にも、YGN 活動は欧州や北米にて盛んだが、近年では他地域にも拡がり、IYNC も本当の意味で国際的な組織・ネットワークに変わってきた。JYGN としては、非欧米圏で数少ない設立当初からのメンバーとして引き続き IYNC に積極的に関与するとともに、特にアジア太平洋地域において、国境を越えた若手の交流、ネットワークづくりを行っていきたい。